The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近代日本小説における「（人が）いる／ある」の意味変化
Author(s)	金水，敏
Citation	待兼山論叢．文学篇．2004，38，p．1-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47903
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

近代日本小説における「(人が) いる／ある」の意味変化

金水　敏

1　鈴木 (1998)

次のような例文では、「いる」「ある」両方が使用される場合がある。

(1)　昔々、あるところにおじいさんとおばあさんが {あり／い} ました。
(2)　教科書以外の本をまったく読まない学生も {ある／いる}。
(3)　田中には奥さんもこどもも {あった／いた}。

これらの現代日本語における「いる」「ある」の分布、使い分けについて、三上 (1953, 1970)、三浦 (1956)、柴谷 (1978)、寺村 (1982)、高橋・屋久 (1984)、金水 (2002)、岸本 (2003) 等の研究がある。直接「いる」「ある」の使用に触れるものではないが、存在文の意味論的な分類を試みた成果として、西山 (1994, 2003) も重要である。また、この問題に歴史的な観点から取り組んだものとして、金水 (1982)、鈴木 (1998) がある。金水 (1982) は、「いる」が存在動詞化して間もない17世紀初頭の「天草版平家物語」を主な資料として、「いる」の分布に強い制約があることを述べるとともに、その後「いる」の使用領域が広がって現代語にいたることを示唆した。鈴木 (前掲) では、近代の文学作品を資料として、「(人が) ある／ない」が減少し、「(人が) いる／いない」が増加していく様子を実証的に示した。

本稿では、鈴木（前掲）の成果に導かれつつ、やや異なった観点を導入することによって若干の補強を図り、同時に金水（1982）で示唆した変化の方向性を実証することを目的とする。

鈴木（前掲）は、人を主語とした場合に「ある」を用いるか、「いる」を用いるかという問題を、話し手・書き手の規範意識と、使用の実態のずれという観点から調査したものである。そのずれが生じる原因として、近・現代における「(人が) ある」から「(人が) いる」への推移があったことを挙げている。

鈴木氏は、松村（1957）に従って近・現代を明治前期、明治後期、大正期、昭和初期、昭和後期の五期に分け、それぞれの時代について次のような小説を取り上げてデータを採集している。なお、「書生気質」と「金色夜叉」は会話部分のみを対象としている。「金色夜叉」は「続金色夜叉」以降は対象とせず、「しろばんば」は前編のみを対象としている。また「子をつれて」「乳母車」は所収の短編をすべて資料とし、その時期的な位置づけは、発表時期の最も早いものとしたとのことである。

明治前期：「書生気質」「浮き雲」
明治後期：「金色夜叉」「其面影」
大 正 期：「子をつれて」「あらくれ」「友情」「暗夜行路」
昭和初期：「若い人」「雪国」「オリンポスの果実」「縮図」
昭和後期：「青い山脈」「山の音」「乳母車」「あいつと私」「父の詫び状」「なんてすてきにジャパネスク」「しろばんば」「山陰路殺人事件」

これらの作品について、「人がある」「人がいる」それぞれの文型の使用頻度を時代区分毎にまとめ、「ある」「いる」の使用率を示したのが次表である。

(表1)

	人がある	人がいる	人がない	人がいない
明治初期	55 50.90%	53 49.10%	13 46.40%	15 53.60%
明治後期	40 8.10%	65 361.90%	10 30.30%	23 69.70%
大 正 期	92 31.50%	200 68.50%	29 44.60%	36 55.40%
昭和初期	136 44.30%	171 55.70%	20 35.70%	36 64.30%
昭和後期	114 21.80%	410 78.20%	22 18.00%	100 82.00%

(鈴木英夫 1998：94)

鈴木氏は、「人がある」から「人がいる」への推移が目に見えて進んだのは、第2次世界大戦を挟んだ昭和後期であると見ている。本文から引用しておく。

(4) 明治期以降の基本的な使い分けについては、

1. 「(人が) ある」は修飾語句を上接するのが一番多い用法で、この用法が最後まで残るものと思われる。

2. 「(人が) いる」は「〈場所〉に人がいる」が圧倒的に多い。

という点が挙げられる。そして、「ある」の場合は「〈人〉(関係・状態)」であり、「いる」の場合は「〈人〉(特定)」が原則である。

こうした基本的な傾向に変化が生ずるのは、昭和後期に入ってからである。

3. 「(人が) ある」の用例数が減る。

4. 「(人が) ない」の用例数も減る。

5. 「客がいる」という言い方が出てくる。

6. 「病人がいる」という言い方もするようになる。

7. 「〈人〉(関係) ーがいる」という言い方も使われるようになる。

(鈴木前掲：95)

鈴木 (前掲) の問題点として、まず「(人が) ある／ない」「(人が) いる／いない」の意味的・統語的な分析にあまり踏み込まず、その総数を機械的に数えている点が上げられる。金水 (2002) で示したように、「いる」には、「ある」にない固有の意味領域があるので、統計的な比較をする場合はその領域を除く必要がある。

また、「おる」の問題もあげることができる。金水 (1996, 印刷中) で述べたことを踏まえると、「おる」は出来事的な意味において「いる」と共通しており、また一部、「いる」と「おる」が相補分布をなしている用法もあるので、「ある／ない」との対立を捉える場合には、「いる」と「おる」はまとめて捉える必要がある。

加えて、本稿では資料として『CD-ROM 版新潮文庫の100冊』を用いて対象とする作品を鈴木(前掲)より増やし、統計的により信頼性の高い結果を得られるよう務めた。以下、具体的に見ていく。

2 意味的・統語的分類

本稿では、存在表現の意味的・統語的分類の方法として、金水 (2002) で示した枠組みを用いる。金水 (前掲) では、存在表現を「空間的存在文」「限量的存在文」「所有文」等に分けている。それぞれ、次のような例が挙げられる。

(5) 今夜のような晩、もし春さんが大阪にいたら、自分はきっと彼を訪ねて行ったろうと思った。(あすなろ物語)

(6) でも病院が焼けてしまって、死んだ人もあれば、郷里に帰ったり、

行方知れずになった人もずいぶんいるわ。(楡家の人々)

(7) 志賀直哉には五人の女の子と一人の男の子があって、男の子の名を、佐野と同じく直吉という。(山本五十六)

空間的存在文は、物理的な時間・空間に対象物が位置づけられることを表す。一方、限量的存在文は、記述によって示された集合が、話題となっている世界において空でないか否かを示す文である。金水（前掲）では、これらの相違は、述語動詞の意味的・統語的性質によって分化していると分析している。すなわち、S型存在動詞とQ型存在動詞である。前者は、存在の対象と存在する場所を表す項を必須としており、統語的には［存在の対象［場所動詞］］のような構造を取る。一方後者は基本的に一項動詞であり、［(場所等)［存在の対象　動詞］］のような構造を取る。空間的存在文はS型存在動詞によってのみ構成される。一方、限量的存在文は、概略、Q型存在動詞によって作られる。現代の標準的な日本語では、「いる」「ある」それぞれにS型、Q型が存在する。ただし、「いる」はS型もQ型も、主語（存在の対象）が有生物に限られるのに対し、S型「ある」は主語が無生物に限られ、またQ型「ある」は、有生、無生の区別なく用いられる。すなわち、S型の場合は、主語が有生か、無生かによって「いる」と「ある」が使い分けられるが、Q型の場合は、有生物主語の場合、「いる」も「ある」も用いられる場合があることになる。(1-2) の用例は、その様子を示している。

なお、所有文も、主格名詞句が有生物の場合「いる」「ある」ともに用いられる。所有文と限量的存在文は、(用語はことなるが) 西山 (1994, 2003) で意味論的な類似性が指摘されている。本稿でも限量的存在文と所有文は一体のものとして取り扱う。すなわち、所有文はQ型存在動詞によって構成されると考える。

さて、以上のように、空間的存在文と限量的存在文は、統語構造および動詞の語彙項目において区別されるべきものであるが、実際にはその区別が難しい場合がある。例えば場所名詞句が動詞の直前にある場合は空間的存在文と認められるが、直前ではない場合、あるいは場所名詞句が表層にない場合は、限量的存在文なのか、空間的存在文なのかは必ずしも明らかではない場合がある。例えば次のような例である。

(8) その茶の間の長火鉢を挾んで、差むかいに年寄が二人居た。(国貞ゑがく)

このように境界的な例があるからこそ、歴史的な変化が生じるものと考えられる。

3 歴史的変化

金水（1982）では、本来変化を表す動詞であった「いる」が室町時代末までに存在動詞になったが、その意味は空間的存在文（同論文では「存在II」）に限定されており、『天草版平家物語』（1593年刊）および同時代の文献において、有生物主語の空間的存在文では「いる」と「ある」が共存していることを示した。また、「いる」はその後も使用領域を拡げ、まず有生物主語の空間的存在文を占有し、やがて有生物主語の限量的存在文（同論文では「存在Ⅰ」）に浸食してきて現在に至っているという変化の道筋を示唆した。また、この変化の方向性を延長していけば、やがて空間的存在文と限量的存在文とを問わず、有生物主語の存在文の全領域を「いる」が占有し、無生物主語の「ある」と対立するようになるのではないかとの予測も示した。この予測は概ね実現しつつあるという証拠がある。すなわち、有生物主語の「ある」（すべて限量的存在文）を許容しない話者が存在するのである。たとえば鈴木（1998）では、作家の丸谷才一が、「昔々、おじい

さんとおばあさんが {ありました／いました}」という例文について「ある」を誤りと述べていることを取り上げている。この、有生物主語の「ある」を許容しない傾向は、若い話者に強く、例えば論者の周辺の学生の多くは同じ感覚を共有しているように見える。論者が2002年に行った、小さなアンケート調査でも、年齢によって「ある」の許容度が異なる傾向が伺えた。

では、いつ頃から、どのようなペースで、有生物主語の「ある」が衰え、「いる」と置き換わっていったのか。この問題に対する実証的な手がかりを提出する論文として、鈴木（前掲）があった訳である。すでに述べたように、鈴木（前掲）では意味に配慮した方法を採っているわけではないが、(4)に示された観察では、「(人が) ある」は限量的存在文であり、また「いる」の典型は空間的存在文であるが、「いる」が限量的存在文に浸出して「(人が) ある」を駆逐しつつあることが述べられていると解釈できる。本稿では、データ作成の段階で意味論的・統語論的な観点を入れて、より具体的にこの変化の実態を把握しようとしている。

4 調　査

すでに述べたように、本稿では資料として『CD-ROM 版新潮文庫の100冊』（以下、『100冊』）を用いた。近代小説は、特定の言語共同体における言語の史的変化を検証する資料として決して優れている訳ではないが、簡単にまとまった量のデータが時系列的に連続的に入手できるという点でこの資料を選んだ。また、同じく小説を資料としている鈴木（前掲）との比較という点でも好都合である。資料の取り扱いについて、注意すべき点を列挙しておく。

- 『100冊』に収められた作品のうち、日本人作家の小説および一部エッセイ、ドキュメント、日記作品を選んだ。

- 文語体で書かれた樋口一葉作品や柳田国男「遠野物語」は除いた。
- 司馬遼太郎「国盗り物語」および田辺聖子「新源氏物語」は、歴史物語のため、用語に特殊な選択が働いている可能性があり、また言語量も大部であるので、念のため分析対象からははずした。
- 地の文と対話・心内語等とは区別しなかった。
- 今回は、作家の出身地や方言については配慮しなかった。特に、野坂昭如作品などでは、会話の中に関西方言が多く混じっているが、排除しなかった。

整理の都合上、作者の生年に着目し、便宜的に、10年単位で用例数をまとめる方針を立てた。取り上げた作品の作者を、生年10年ごとに句切って示しておく。名前の後ろの数値は各人の生年である。

1860年代　森鷗外（1862）、伊藤左千夫（1864）、夏目漱石（1867）

1870年代　島崎藤村（1872）、泉鏡花（1873）、有島武郎（1878）

1880年代　志賀直哉（1883）、武者小路実篤（1885）、谷崎潤一郎（1886）、山本有三（1887）

1890年代　芥川龍之介（1892）、宮沢賢治（1896）、三木清（1897）、井伏鱒二（1898）、川端康成（1899）、石川淳（1899）

1900年代　壺井栄（1900）、梶井基次郎（1901）、小林秀雄（1902）、竹山道雄（1903）、林芙美子（1903）、山本周五郎（1903）、堀辰雄（1904）、石川達三（1905）、井上靖（1907）、中島敦（1909）、太宰治（1909）、大岡昇平（1909）、松本清張（1909）

1910年代　新田次郎（1912）、福永武彦（1918）、水上勉（1919）

1920年代　阿川弘之（1920）、三浦綾子（1922）、遠藤周作（1923）、池波正太郎（1923）、安部公房（1924）、吉行淳之介（1924）、三島由紀夫（1925）、星新一（1926）、立原正秋（1926）、北杜夫（1927）、吉村

昭 (1927)

1930年代　開高健 (1930)、野坂昭如 (1930)、三浦哲郎 (1931)、有吉佐和子 (1931)、曽野綾子 (1931)、五木寛之 (1932)、渡辺淳一 (1933)、井上ひさし (1934)、筒井康隆 (1934)、大江健三郎 (1935)、倉橋裕美子 (1935)、塩野七生 (1937)

1940年代　藤原正彦 (1943)、椎名誠 (1944)、沢木耕太郎 (1947)、宮本輝 (1947)、赤川次郎 (1948)、高野悦子 (1949)、村上春樹 (1949)

なお、具体的な作品名は、本稿末尾に掲げておく。

これらの作品について、有生物主語を持つ「ある」「ない」「いる」「おる」の用例を採取していった。用例の採取・整理には、佐野 (2003) に添付されたCLTOOLおよびMicorsoft Excelを活用した。「おる」は鈴木 (前掲) では取り上げられていなかったが、金水 (1996, 印刷中) で明らかにしたように、「いる」と基本的な意味は同じで、一部形態的に相補分布をなす部分もあるので、最終的に「いる」の用例と合算して統計に含めた。なお「おる」の用例の中には、方言的なものや、役割語的なもの (cf. 金水 2003) もあるが、今回は区別しなかった。

採集の結果として集まった用例は、「ある」620例、「ない」426例、「いる」6,011例、「おる」252例であった。データ量を鈴木 (前掲) と比較した場合、「ある」については約1.4倍であるが、「いる」については6.7倍にもなっている。これは、鈴木 (前掲) では採集する文型を狭く限定しているのに対し、本稿では文型の制限をゆるめなかったことによるものであろう。

5　分　析

上記のデータに意味的・統語論的分析を導入していく。存在文の分類としては、空間的存在文、限量的存在文、所有文、「リスト存在文」などを区

別した。次のような、人の生き死にを表す「生死文」、神や幽霊の実在を表す「実在文」は、金水（2002）では空間的存在文の一種として扱ったが、今回は周辺的用法として別扱いした。空間的存在文か、限量的存在文か判断が難しい用例が「いる」「おる」にあったが、これは「境界的用例」として処理した。

まず、空間的存在文の取り扱いについて述べる。今回のデータの中で、「ある」「ない」が空間的存在文として用いられた例は皆無である。一方で、「いる」では3,929例、「おる」では143例にのぼる。すなわち、今回の資料では空間的存在文は「ある」「ない」と「いる」「おる」が完全に相補分布しているので、この部分については、はずして考える必要がある。また、「リスト存在文」「生死文」「実在文」「境界的用例」等は、用例も少なく、また本稿の目的からずれるので、対象からはずした。

この結果、残った用例は総数で次の通りである。

ある　限量的存在文：548例、所有文：71例

ない　限量的存在文：352例、所有文：71例

いる　限量的存在文：1,655例、所有文：246例

おる　限量的存在文：84例、所有文：20例

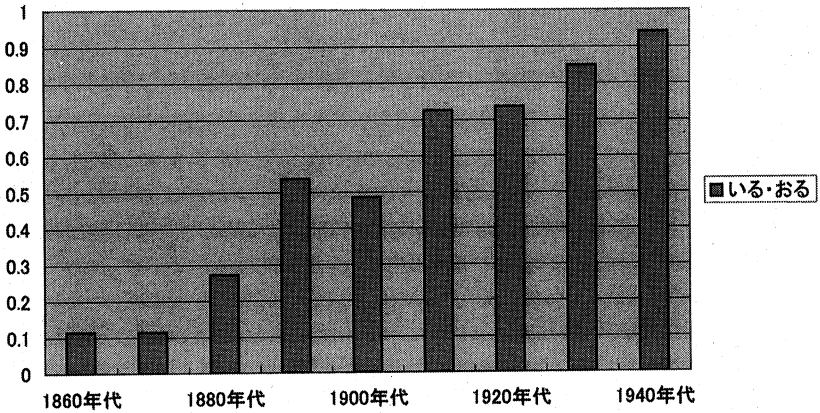
これを、作者の生年10年ごとにまとめた表が表２である。

（表２）

生年西暦	ある		ない		(ア)	(ウ)	いる		おる		(イ)	(エ)
	限量的	所有	限量的	所有	計	%	限量的	所有	限量的	所有	計	%
1860年代	33	8	19	10	70	89%	9	0	0	0	9	11%
1870年代	72	4	22	3	101	89%	12	1	0	0	13	11%
1880年代	65	9	52	8	134	73%	44	6	0	0	50	27%
1890年代	72	6	40	2	120	46%	126	4	8	1	139	54%
1900年代	121	21	93	15	250	51%	195	35	5	5	240	49%
1910年代	25	5	25	2	57	28%	124	21	4	1	150	72%
1920年代	122	7	55	11	195	26%	417	78	36	12	543	74%
1930年代	30	9	38	16	93	15%	447	51	17	4	519	85%
1940年代	8	2	8	4	22	6%	281	50	14	2	347	94%

この表では、各年代の、「ある」「ない」の限量的存在文、所有文の合計(ア)、「いる」「おる」の限量的存在文、所有文の合計(イ)を示している。さらに、(ウ)＝(ア)÷((ア)＋(イ)) の百分率、(エ)＝(イ)÷((ア)＋(イ)) の百分率をそれぞれ提示した。これを見ると、(ウ)は年代を追うごとに漸減、逆に(エ)は漸増していることが分かる。このうち、(エ)についてグラフ化したのが図１である。

(図１)



このグラフを見ると、おおよそ３つの世代に分けられることが分かる。一つ目は、1870年代まで、二つ目は1880年代から1900年代まで、三つ目は1920年代以降である。第一世代は、「いる」「おる」の使用率は10％程度に止まる。第二世代では「いる」「おる」の使用率が上昇傾向に転じ、50％前後まで増加する。第三世代では、70％に跳ね上がったあと増加し、90％以上にまで至る。1940年代生の作者にあっては、空間的存在文・限量的存在文の区別はすでになく、主語の有生性によってのみ「いる」と「ある」が使い分けられる状態になっていると見てよいであろう。

ここまでの分析では、作者の生年に基づいて推移を見てきたが、別に行ったごくラフな、作品の発行年に基づく調査によると、1900年代、1910年

代～1940年代、1950年代以降の三つの時期に分けられることが知られる。「いる」「おる」の使用率は、第一期は10％足らず、第二期では30％前後、第三期では50％程から増加して1980年代には90％を超えている。この結果を見ると、第二次世界大戦以降の伸びが急であることが分かる。鈴木（前掲）では、変化の時期を昭和後期と見ているが、その分析とも符合する。

6　まとめと課題

本稿では、近代日本の小説を中心とする作品を対象とし、「いる」と「ある」が併用される限量的存在文・所有文の「いる」「おる」と「ある」「ない」の分布を調べ、この領域で「いる」が増加していること、特に第二次世界大戦後の延びが著しいことを確認した。全体として、金水（1982）で予測した経路を辿り、現在、最終段階直前に至ったと認めることができる。もとより、金水（1982）における調査が畿内中央語による歴史資料であるのに対し、今回の調査が近代の言文一致体文献であるという点で、言語の自然な推移と見るには留保が必要であるが、中世から近代にかけての日本語の大きな潮流は十分捉えられたと考える。

なおこの調査では、戦前における「いる」の伸長が緩やかであるが、これは小説という書き言葉の世界における、規範の重みということを割り引いて考える必要があるかもしれない。すなわち、話し言葉の世界ではもっと早くから「いる」が伸長しており、戦後、書き言葉が緩み、新傾向が顕著に見えてきたということも考えられる。

これらの点を考慮するには、文芸作品だけでなく、一般話者を対象とする社会調査、談話資料の調査など、調査手法を組み合わせ、多角的な視点から分析を進める必要がある。その場合、当然方言的要素や、規範意識の濃淡など、社会言語学的観点も必要となるであろう。すべて、今後の課題としたい。

作品リスト

■森鷗外「カズイスチカ」「興津弥五右衛門の遺書」「護持院原の敵討」「高瀬舟」「高瀬舟縁起」「最後の一句」「山椒大夫」「二人の友」「杯」「百物語」「普請中」「妄想」■伊藤左千夫「守の家」「浜菊」「姪子」「野菊の墓」■夏目漱石「こころ」■島崎藤村「破戒」■泉鏡花「歌行燈」「高野聖」「国貞ゑがく」「女客」「売色鴨南蛮」■有島武郎「小さき者へ」「生れ出づる悩み」■志賀直哉「雨蛙」「好人物の夫婦」「濠端の住まい」「佐々木の場合」「山科の記憶」「十一月三日午後の事」「小僧の神様」「城の崎にて」「真鶴」「赤西蛎太」「冬の日」「痴情」「転生」「冬の往来」「晩秋」「焚火」「流行感冒」「瑣事」■武者小路実篤「友情」■谷崎潤一郎「痴人の愛」■山本有三「路傍の石」「路傍の石・あとがき」「路傍の石・ペンを折る」「路傍の石・付録」■芥川龍之介「芋粥」「運」「袈裟と盛遠」「好色」「邪宗門」「俊寛」「鼻」「羅生門」■宮沢賢治「オツベルと象」「カイロ団長」「シグナルとシグナレス」「セロ弾きのゴーシュ」「ビジテリアン大祭」「ひのきとひなげし」「マリヴロンと少女」「よだかの星」「黄いろのトマト」「銀河鉄道の夜」「双子の星」「猫の事務所」「北守将軍と三人兄弟の医者」「饑餓陣営」■三木清「人生論ノート」「人生論ノート・後記」■井伏鱒二「黒い雨」■川端康成「雪国」■石川淳「かよい小町」「マルスの歌」「葦手」「喜寿童女」「山桜」「処女懐胎」「焼け跡のイエス」「張柏端」■壺井栄「二十四の瞳」■梶井基次郎「Kの昇天」「ある崖上の感情」「ある心の風景」「のんきな患者」「愛撫」「闇の絵巻」「過古」「器楽的幻覚」「後尾」「桜の樹の下には」「城のある町にて」「雪後」「蒼穹」「泥濘」「冬の日」「冬の蝿」「橡の花」「路上」「檸檬」「筧の話」■小林秀雄「モオツァルト」「偶像崇拝」「光悦と宗達」「骨董」「実朝」「真贋」「西行」「雪舟」「蘇我馬子の墓」「鉄斎」「徒然草」「当麻」「平家物語」「無情といふ事」■竹山道雄「ビルマの竪琴」■林芙美子「放浪」■山本周五郎「さぶ」■堀辰雄「風立ちぬ」「美しい村」■石川達三「青春の蹉跌」■井上靖「あすなろ物語」■中島敦「李陵」「山月記」「弟子」「名人伝」■太宰治「人間失格」■大岡昇平「野火」■松本清張「点と線」■新田次郎「孤高の人」■福永武彦「草の花」■水上勉「雁の寺」「越前竹人形」■阿川弘之「山本五十六」■三浦綾子「塩狩峠」■遠藤周作「沈黙」■池波正太郎「剣客商売」■安部公房「砂の女」■吉行淳之介「砂の上の植物群」「樹々は緑か」■三島由紀夫「金閣寺」■星新一「人民は弱し官吏は強し」■立原正秋「冬の旅」■北杜夫「楡家の人々」■吉村昭「戦艦武蔵」■開高健「パニック」「巨人と玩具」「裸の王様」「流亡記」■野坂昭如「アメリカひじき」「プアボーイ」「ラ・クンパルシータ」「火垂るの墓」「死児を育てる」「焼土層」■三浦哲郎「忍ぶ川」■有吉佐和子「華岡青

洲の妻」■曽野綾子「太郎物語」■五木寛之「風に吹かれて」■渡辺淳一「花埋み」■井上ひさし「ブンとフン」■筒井康隆「エディプスの恋人」■大江健三郎「死者の奢り」「飼育」「人間の羊」「戦いの今日」「他人の足」「不意の唖」■倉橋裕美子「聖少女」■塩野七生「コンスタンティノープルの陥落」■藤原正彦「若き数学者のアメリカ」■椎名誠「新橋烏森口青春篇」■沢木耕太郎「一瞬の夏」■宮本輝「錦秋」■赤川次郎「女社長に乾杯！」■高野悦子「二十歳の原点」■村上春樹「世界の終わりとハードボイルド」

参考文献

金水　敏(1982)「人を主語とする存在表現—天草版平家物語を中心に—」『国語と国文学』59-12, pp. 58-73.

金水　敏(1996)「「おる」の機能の歴史的考察」山口明穂教授還暦記念会『山口明穂教授還暦記念国語学論集』明治書院, pp. 109-132.

金水　敏(2002)「存在表現の構造と意味」近代語学会（編)『近代語研究』第11 輯、武蔵野書院, pp. 473-493.

金水　敏(2003)『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』岩波書店.

金水　敏(印刷中)「全国共通語「おる」の機能とその起源」『近代語研究』第12輯.

佐野　洋(2003)『Windows PC による日本語研究法』共立出版.

柴谷方良(1978)『日本語の分析』大修館書店.

鈴木英夫(1998)「規範意識と使用の実態-「(人が) ある」と「(人が) いる」を中心として-」『日本語学』17-6、pp. 80-96.

高橋太郎・屋久茂子(1984)「「～がある」の用法—(あわせて)「人がある」と「人がいる」の違い—」『研究報告書』5 (国立国語研究所報告79) , pp. 1-42.

寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版.

西山佑司(1994)「日本語の存在文と変項名詞句」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』26, pp. 115-148.

西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房.

松村　明(1957)『江戸語東京語の研究』東京堂出版.

三浦つとむ(1956)『日本語はどういう言語か』講談社（1976年, 改稿・増補版が講談社学術文庫として発刊).

三上　章(1953)『現代語法序説』刀江書店(1972年, くろしお出版より復刊).

三上　章(1970)『文法小論集』くろしお出版.

（文学研究科教授）

SUMMARY

Semantic Changes of "(*Hito ga*) *iru*/*aru*" in Modern Japanese Novels

Satoshi KINSUI

This paper examines the historical change in the expressions of existence in modern Japanese, using the literary works included in the *CD-ROM ban shinchô-bunko no 100-satsu* (*100 works of the shinchô-bunko series on CD-ROM*). Similar studies using other works include Suzuki (1998). The following is a summary of the differences between this paper and Suzuki (ibid.), and on the main points presented in this paper.

1. Suzuki (ibid.) counts the total number of constructions of forms (*hito-ga*) *aru* and (*hito-ga*) *iru*. However, this study analyzes those examples where the use of *aru* and *iru* are in opposition. In other words, the focus is on those examples which are either Quantificational Existence sentences or Possessive sentences. The Spatial Existence sentences that only involve the verb *iru* have been eliminated from the data.
2. Results show that with every passing decade, usage of the verb *aru* decreases in the Quantificational Existence and Possessive sentences, and instead, the usage of the verb *iru* increases.
3. Based on the pattern of changes observed, the authors can be classified into three generations. Those who show the most increase in usage of *iru* are the third generation authors born in 1920 or later. This result coincides with that of Suzuki (ibid.) that it is due to the increase of the expression (*hito-ga*) *iru* after World War II.

キーワード：日本語，存在表現，歴史的研究，ある，ない，いる，おる